



CIF JAPAN

NEWSLETTER No.41

Council of International Fellowship Japan

発行人 NPO 法人 CIF ジャパン 理事長 坂本 正路

編集人 坂岡隆司 発行日 2019年8月1日

事務局 〒607-8216

京都市山科区勸修寺東出町 75 からしだね館

Tel.075-574-2800 Fax 075-574-0025

2019年度総会が 開催されました。

今年度の定期総会は、2019年5月18日(土)午後、法人事務所のある「からしだね館」(京都市山科区)で開催されました。また、総会に先立って、本年度第1回理事会が開催されました。報告、議案については、おおむね総会資料の議案書の通り承認されました。概要は以下の通りです。

①2018年度事業報告、決算報告は、原案の通り承認された。

②第3回 IPEP(国際交換研修)を2020年10月に開催する。これに向けて、今年度から準備作業を行う。

第3回 IPEP の日程：2020年10月9日(金)～24日(土)／実施場所：京都市を中心とする日本国内／募集人員：3名(選考の結果4名にすることもありうる)／参加費：300ユーロ／資金：助成金の他、会員寄付を予定。

今後の準備作業の日程などを確認した。

③ホームページのリニューアルについては、昨年度完了であることが出来ず、予算も持ち越しとなった。2019年度に改めて取り組む。

出席者：坂本正路、梶村慎吾、浅野純江、坂岡隆司、三宅浩、上利久芳、藤本聿子、以上7名。他に、委任状・書面表決16名



左より：梶村、藤本、坂岡、三宅、坂本、浅野、上利
(敬称略)

動き出したIPEP－2020

理事長 坂本 正路

オリンピックの年と言われる2020年は、私たちにとっては第3回の国際研修IPEPの実施年になります。過去2回の研修ではいろいろな課題がありながらも、成功裡に終わることが出来ました。特に前回は、タイからの参加者を含む4名の研修参加者を迎えることが出来ました。

今年のフランスの国際大会に参加した青木さんによりますと、日本でのIPEPに関心を持つ何人かの参加者があったということです。先日お会いした同志社大学の木原教授に、来年10月予定の実施の際に、前2回同様の協力をお願いしたところ、こころよく承諾していただけました。いよいよ国際研修の準備がスタートしたと言えるでしょう。

現在の課題は国際研修実施にあたって、その資金の捻出ということです。前回については愛恵福祉支援財団から、かなりの支援金をいただき実施できたのですが、今回はそのような支援金をいただける状況にありません。したがって本会が独自の努力によって資金を集めねばなりません。会員一人一人が公私にわたって資金集めと寄付をお願いしなければなりませんので、国際研修の成功のためにご協力を切にお願いいたします。

■第3回 IPEP 準備スケジュール

2019/8/31 第1回準備会

9/30 募集要項決定

10月中旬 広報チラシ決定
(CIF本部承認)

11/01 募集開始

国際本部サイト掲載

2020/2月末日 応募締切

4月中旬 候補者選考会

4月末日 選考会結果通知

特集

「思い出の一枚」

今号の発行にあわせて、会員の皆様に CIP/CIF 研修の写真「思い出の一枚」と、それにまつわる一文をお願いしたところ、10名の皆様から貴重な投稿をいただきました。寄稿者お一人ひとりにとって、それぞれの研修が、まさに人生の宝とも言えるほど、どんなに大切な経験であったかと容易に想像出来ました。また、寄せられた原稿や写真を通して、改めて CIP/CIF の理念を教えられる思いがしました。寄稿頂いた皆様本当にありがとうございました。

掲載は研修年順とさせていただきます。字数については、前号にならって 500 字程度を想定しておりましたが（字数を問われた時には目安としてお答え）、結果的には「自由」となりました。しよせん字数制限は無理があるなあ、とつくづく納得。楽しく感動的な編集作業でした。（編集者）

CIP CLEVELAND,

Maria <sound of music から>

そして『千の風になって』

小池嘉夫 (1964 Cleveland)



■ 思い出の原点です。

この建造物。私にはいとおしく実に懐かしい一枚の写真です。これはクリーブランド市庁舎（City Hall）です。55年前と比べると、当然のことながら少々の違いが見られます。人は55年たてばたいへんに様変わりするもの。その対比は妙味です。1964年4月、私のアメリカでの CIP Participant としての生活がここから始まりました。Cleveland には青少年指導者約50人、社会福祉従事者30人余りが参加していました。いずれ2班に別れて授業がされたものの、昼休みの2時間は皆が思い思いの弁当を持ちより、この正面玄関左ウイングの前に在った大きな草むらに車座を作って座り込み談笑したものでした。ときに興

がのり過ぎて、午後の授業に遅れ、せき立てられてそれぞれの教室へ駆け込むこともありました。まったく違う国柄の、年齢もバックグラウンドも、将来志向も違った男女、英語力にも格段の差があった人たちとの触れあい、それがクリーブランド研修の原点だったと思います。

■ 自分ひとりが浮かれていました。

半年前の1963年10月にクリーブランドから随分と分厚い航空郵便を受け取りました。はやる心を抑えながら開けた封筒から、たくさんの書類といっしょに米国国務省の招待状が出てきて、それを見たたんについすっかり舞い上がってしまったのです。上司のやっかみや同僚たちの羨望の眼をよそに事務局長に手紙の束を渡しました。プログラムは前半の3ヶ月が研修、後半の2ヶ月が実習となっていて、実習先は United Appeal of Cleveland (クリーブランド共同募金会) とあるではありませんか。同市はアメリカでの共同募金運動発祥の土地柄、何たる幸運と再び舞い上がってしまいました。その当時の私は社会福祉法人・中央共同募金会に勤める若手事務局員でした。冷静に考えれば、私がアメリカへ出発した年の4月1日からは渡航が自由化されていて、渡航費も500ドルと以前の2.5倍まで増額されていたのです。誰でもアメリカへ自由に行ける時代になったのです。そうしたところは見ないでおうおうということでもまことに自分本意だったと思っています。事務局長は経理課長を呼んでしばらく協議していた後、今度は私を呼び、『この研修会に含まれた実習はまさに将来の本会に執っても大事な経験だから、実習期間2ヶ月間は仕事をしているものとみなし給料を支給します』とのありがたい仰せに3連続して舞い上がってしまいました。1964年4月16日、当時、羽田空港特別待合室で恒例だった歓送万歳に送られて機上の人となりました。初めて乗った飛行機はジェット機でシアトルまでの直行便でした。

■ 「いけ好かない。不公平だ！」

高揚感で天狗の鼻高々になっていた私にもたいへんにショッキングな出来事がありました。ある日、いつものように仲間たちと車座を組んで談笑していると、中年の紳士が私に近づいてきて、何処から来たの？と聞くから、日本からだと応えました。費用は誰が負担したかとの問いに対して、当然に財団が負担していると答えたのです。私にすれば、研修員として採用すれば財団だけでなく、他の研修員にとっても有益だから採用されたという自負心があったのです。すると紳士は眼の色を変えて食い下がって来ました。『君が何と言おうが、日本は今年オリンピックを招致する国ではないか。今までロンドンの病院で開催されていた身障者による田舎風の運動会をオリンピックに繋げてパラ

リンピックという名称の競技大会にすると聞いている。さらに10月には新幹線 (bullet train) を走らせるというのではないか。そんなに経済力のある国が自国からの参加者にかかる費用を負担しないのは、本来、途上国にいくべき席が1つ減らされていることになる。それでは fair といえないのではないか。』私の知らないことまで並べ立てたのです。

これに対しては、社会福祉の世界では、もはや戦後は終わったという通産省の発表には異論があったものの、私の英語力では当意即妙の会話でやり返すことは不可能で、私の完敗に終わりみんなの前で恥をかかされたのでした。以来、私の自尊心には幾分か平衡を保つように方向づけがされたように思っています。

■ Sound of Music. マリアとともに

これは今から58年遡ったころの話になります。当時の私は大学の2年生でした。あのころ自由選択科目で『英字紙講読』という授業がありました。毎週の木曜日にその日の The Japan Times を買って教室へ入ると教授が紙面の1~2の記事を選び、記事そのものを読むのではなく、その背景にある多彩なポイントについて解説し、かつ、学生も自分の持つ知識や経験の範囲で教授の解説について意見を述べるという、たいへんにユニークな授業でした。たとえば、当時アン・ランダースという女性コラムニストがいて、“My Favorite Thing”という題名で、作詞家不詳の詩文を紹介していました。内容は芥川賞作家の新井満さんが訳詩作曲し秋川某なる歌手が朗々と歌ってヒットした、『千の風になって』の原詩でした。58年前にはまだもと歌の作曲など当然ありえないことでしたが、授業中にひとりの学生が立ち上がって自分の知識を述べ始めたのです。いわく、この記事のタイトルは有名なミュージカル Sound of Music 『私の好きなもの』を使用している。いわく、私の好きなものとは、白地に紺色のサテンをベルト風にあしらった洋服を着た女の子~、ドアチャイムの響き~、それに雪ゾリの鐘の音。マリアと7人の子供たちが絡んで歌うドレミの歌、おしまいに政治の圧制を逃れて家族ともども亡命した父親が歌う故郷の歌エーデルワイス。いずれも往年の名コンビ、リチャード・ロジャースとオスカー・ハマースタイン2世のヒット作である、と滔々と述べたのでした。もちろん教授はそんなことは先刻ご存じのはずでしたが黙って聴いているという構図でした。少しカルチャーっぽい知識には反発もしましたが、とにかくユニークな時間でした。

アメリカへ行って3番目のホストファミリーに居住していたときのこでした。そこはシェーカーハイツと呼ばれ、昔風の豪邸が建ち並ぶアメリカ

でも有数の高級住宅街でした。

そのホストマザーがチケットを買ってくれ付き添ってくれたのが地方公演の Sound of Music でした。この住宅街の外れにある大きな草原に突如として奇怪な建造物が現れました。近づいて見ると軽量鉄パイプを組み合わせた半球型のドームでした。その上からシートを張り巡らし、内装を整え、舞台と客席を案配した円形劇場で、ここで Sound of Music の地方公演が行われたのでした。これだけの小屋がけをして、大規模の楽員を擁し、少なからぬ出演者を引き連れて地方公演を行っているミュージカル・グループがそこそこの利益を得ていると聞いたとき、アメリカの音楽産業界の底力を感じたものでした。クリーブランドで聴いた Sound of Music についてはメインキャストを知らないまま大感激し、ここでも舞い上がってしまいました。アメリカ滞在中に、その後に移動したホストファミリーではどの家庭でも、往年のメリー・マーチン主演のレコードを持っていたので、それを再生し堪能していました。千の風になってのオリジナルは別掲してあります。味わいの深い詩だと思っています。後年、作者とおぼしき女性が亡くなったと、ボルチモアの夕刊が報じていました。

ことほど左様に、このクリーブランド市庁舎写真は、何十年も前のことをあたかも昨日のこのように、かつ重層して思い出が思い出につながり、心を豊かにしてくれます。ですから、私には CIP/CIF の原点に建っているのです。

A THOUSAND WINDS (Author Unknown)

Do not stand at my grave and cry;
I am not there, I do not sleep.

I am a thousand winds that blow;
I am a diamond on snow,
I am the sun light on ripened grain;
I am the gentle autumn's rain.

When you awake in the morning hush;
I am the swift uplifting rush
Of quiet birds in circled flight,
I am the soft star that shines at night.

Do not stand at my grave and cry;
I am not there, I do not sleep.



.....

今も胸躍るあの日々の思い出

眞崎頌也 (1967 Cleveland)

それは戦後の混乱と貧しさをまだ身にまといながらも、夢を抱き暖めていた私に、差し込んできた明るい光でした。CIPを紹介してくれた前田先輩、後援して頂いたアジア財団のほか多くの日本の、そして現地の方々を思い出すと今も胸迫るものがあります。

オランダ博士の「福祉に先進国はない、皆途上国なのだ」と言われた言葉などは、自戒として今も心に残っています。また多くの参加者を招きながら事務局の働きの実に細かく行き届いていたことなども思い出します。

研修中に第3次中東戦争がありました。剽軽だったイスラエルのヨッシー、GFに目の無いエジプトのイブラヒム、ヨルダンやレバノンの仲間たちにもショッキングな事だったようでしたが、それでも夕方には共に気遣い合いながらビールを飲み交わしたものです。CIPの中には戦いはありませんでした。

フィールドワークはシラキューズのファミリーセンターで、私は2週間実務についたあとこの施設の活動の記録映画を作成することが課されていました。この時のカラーの記録「The Camp, where the swimming so good」と、同時に作った「15歳から90まで」というボランティア活動の記録集は、当時いろいろな方面で活用して頂いたのですが、今は手元にありません。

穏やかで心広くみんなに好かれた施設長の「Uncle Paul」を中心に、共に働いた多くのスタッフそして、当時私とともにキャビンで寝起きた6人ずつ3組の少年たち、今はもう孫を抱く世代になっているのでしょうか。私の胸には今でもやんちゃでいたずらっ子で愛らしかった姿なのですが……。

86歳の私、今も障害のある仲間たちの作業所とグループホームの仕事につながって、幸せです。



写真①

写真①

サングラス姿のオランダ博士、その膝に頭をのせて何とぶしつけな私……



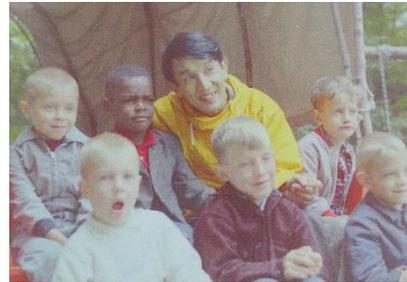
写真②

ウエスタンリザーブ大学のセミナーで担当講師を囲んで



写真③

ファミリーキャンプのアンクル・ポール（ワイナンディ所長）はだれからも慕われていました。



写真④

幌馬車の上で子どもたちと

.....

ミネアポリスでの研修

上野美紀 (1974 Twin Cities)

CIP の研修プログラムの青少年リーダーの枠で、ガールスカウト活動が先進的なミネアポリスカウンシルに派遣されました。

最初はNYのホテルで、各国からの参加者約160名が集まり創始者オランダ氏が皆を迎えて下さり CIP について、ボランティア、参加者が知り合う為のプログラムや観光スケジュールが組まれていました。ミネソタへはCIPの担当の方と共に27名でミネアポリス空港に着き、郊外の静かで美しい田園風景の中にあるヴィラ・マリアと言う修道院の様な場所で3日間位オリエンテーショ

ンがあり米国生活の実際的な留意事項、大学の授業、それぞれの派遣元（ガールスカウトカウンスル）との連絡など きめ細かいプログラムで行き届いた事前研修でした。最後はミネソタ大で教室や学内を確認して ホームステイ先の家族の元へいよいよ独り立ちの始まりで不安でした。この時お迎えのホームステイ先の家族の車の下の部分がレースの様にボロボロでどんな家に行くのかと不安になっていたら冬は道が凍結（-40° F） 大量の塩をまくので、車がすぐボロボロになると言うことでした。

学校とキャンプ地へのアクセスの関係で 2-3 週間毎に代わるホームステイ先は医師、校長先生、大学教授など立派な家庭で障害のある子供さんがおられる家庭もありましたが 皆家族の様に迎えて下さいました。

最初の2~3 週間は大学で一般的な社会福祉事業やシステムの授業があり、その後 各々の研修先 老人問題、青少年犯罪、4H クラブ等々へ派遣されて、私はガールスカウトのキャンプのスタッフとして各地のキャンプ場へ行きました。



ミネソタには有名なミシシッピ川の源流があり、別名 1 万湖の湖の州と呼ばれていて氷河期の湖が至る所にあり湖と湖が川でつながっているところも多いです。森と湖の国という感じです。

この素晴らしい自然環境の中でミネアポリススカウト連盟が持っているキャンプ場は 10 か所以上あり芝生や環境の養生の為に毎年その半分位しか使わないそうです

低学年のキャンプ場は市内から 20km の所で森と湖のキャンプ地にいくつものコテージとセン

トラル棟、食堂棟があり 1 つのコテージにスカウト 10 人とリーダー 2 人で 50 人から 100 人位で 2 週間位キャンプをします。

ここで普通のスカウト達のキャンプも手伝いましたが 印象的だったキャンプは知的障害者のスカウトのキャンプで旗揚げ、クラフト、ハイキング、水泳、カヌーキャンプファイヤー、夏のクリスマス、ハロウィーン等健常児と同じプログラムをしますがリーダーの数がスカウト 3 人に 1 人、リーダーは 2 日毎に 24 時間 キャンプ地内の完全に隔離された建物で休息をとるシステムでリーダー不足の日本では考えられないことでした。

又 障害者キャンプでは別棟で両親や健常者の兄弟姉妹の精神的悩み、学校での対処方、世間の偏見との対応等専門家から色々な講習を受けるプログラムもあり障害のある子をもつ家族がサポートを受ける事ができます。



ミネアポリスから 300 km 位北の高学年用キャンプ場はまさに地平線まで草原でサイトにあるのは緊急用かまぼこハウスのみでテントを張り棚、テーブル、キッチン等を作る（日本では竹を使いますがここでは箒の柄→柄だけ購入可）スキルのあるキャンプはまさにスカウトらしいキャンプでした。地平線の彼方に夕日が落ち、たき火を囲むと 夜空は満天の星が輝きまるでプラネタリウムの中にいる様で余りの美しさにスカウトがテントの裾から顔だけ出して星を見ながら寝ていました。

キャンプ中一番怖いのが竜巻で“トルネード警報”が出るとスカウトもリーダーも顔色が変わります。その為どのキャンプ場にもある程度の深さの塹壕の様な溝がうねうねと掘ってあってそこに避難します。

もう一つの印象的なキャンプはカヌートリップでテントと食料を防水リュックに詰めてカヌーで湖から湖へと繋がっている川を利用して移動キャンプをするもので携帯電話などない時代なのであらかじめ決めた場所で本部のジープから食料等の支援を受け緊急時は軍隊用（？）無線のみと言う 野性味のあるキャンプでした。

他にはホースライディングキャンプもあり乗馬技能に応じて隣の州まで馬で移動するキャンプ

も用意されていたりとスケールの大きさに驚くばかりでした。

どこのキャンプでもスカウトに日本昔話をせ



がまれてランプの下で話をしました。“かぐや姫”が一番人気でした。

就寝ラップの音を聞いて（始めは下手なのが キャンプが終わりに近づくと上手くなりあちこちのサイトから拍手や口笛が聞こえます）スカウトは月に帰ったお姫様を夢見て眠ります。

帰国後は当時高校生、大学生だったスカウトが毎年日本やアジア旅行に来て我が家に泊まって日本の名所を一緒に訪ねることが出来ました。

福祉関係が仕事ではなかったのでCIFのお手伝いは余り出来ませんでした。がガールスカウトと共にミャンマーの井戸掘り（10年プロジェクト）やネパールに孤児院建設等女性に教育の機会を与える活動を YMCA やロータリークラブのご支援を頂いて出来、体力的に僻地へ出向くのが難しくなった今は 大阪大学の日本語教室のお手伝いをしています。

CIP で学んだ友情、好意、善意の数々、オレンドルフ博士の「あなたに与えられたものは 次に必要としている人の手にさしあげなさい」に大きな



後押しを頂いて、今も幸せと感謝の気持ちで一杯です。CIP への参加は一生の宝物です。

「古い木製のキャンドルスタンドが語る」 ～与えられた生きる力～

牧田稔 (1976 Cleveland)

1976年にCIPの研修に参加する機会が与えられましたが、講義は私の英語能力不足で全く記憶に残っていません。実習先のデイレクターから、地域が危険だからカメラは持参しない、また昼食代

と交通費以外の現金は所持しない、地域を一人で歩かない等と注意され、写真は撮ってなかったことと、5軒のホストファミリーでお世話になり（長くクリスマスカードの交換をしていましたが、全員亡くなられました）、数枚のホストファミリーの写真も阪神大震災で失いました。そのため、要請された「思い出の一枚」の写真はありません。（代わりにこの原稿のために撮った写真を添付します）CIP の研修のフィールドワークの場所は、オハイオ州のクリーブランドのウエストサイド YMCA で、黒人やプエルトリコ人、インディアン、その他マイノリティーグループといわれる人々が住む大変貧しい地域でした。私は4箇月のコースでしたが、1年のコースだったホンジュラスから参加していたオスカ氏は、私の実習先と近いラテンアメリカセンターで実習をされていたのですが、私の帰国後に射殺されたという CIP 事務局から悲しい知らせがありました。彼は英語がよくでき、彼によく助けてもらいました。



私を指導してくれたのは、ウエストサイド YMCA 主任主事のウィリアム・J・グリーン氏でした。その彼から、1985年に、突然小包が届きました。開いてみると、古

い木製のキャンドルスタンドと手紙が入っていました。手紙には、病床にあってクリスマスカードが出せなかったお詫びと、日米開戦があった1941年からYMCAの主事として40年間奉職し、退職した時に、YMCAから一つだけ家に持ち帰ったこのキャンドルスタンドの説明が記されていました。

それは、YMCAの入会式やチャペルやクリスマスの時に使っていたこと、多くの青少年に明るさを灯し続けたこと、自分がYMCAで働いてきた証として大切にしてきたこと等の説明の後に、自分が持ち続けてきた平和への祈りや願いを、このキャンドルスタンドに託して、日本のYMCAで働く私にプレゼントしたいと記載されていました。

彼はその直後にガンで天に召されましたが、この手紙で、堂々と自分はガンであることを受け止め、手術の痛みや苦しみに耐えながら、「I am not a kids（私は子どもではないのだ）」と記し、病床で奥様のケアに感謝し、結婚45周年を迎えられたこと、また自分の人生は、素晴らしい人生だったと感謝が述べられていました。

「Dear friend MAKITA」で始まり、「Your friend always Bill Green」で終わるこの最後の手紙と、彼のライフ・スピリットを表すこのキャンドルスタンドは、私に大きな励ましと、人間として何を大切に生きていくかを伝えられたように思えてな

りません。彼の召天の知らせを受けた時、彼の最後の手紙をコピーして奥様に送付し、彼の想いと託されたキャンドルスタンドを、私の宝物にしたいとお悔やみの便りをしました。

阪神大震災の2日後の混乱の中で、無意識に持ち出した彼のキャンドルスタンドが、住む家を失い、これからどう生きていくか悩みつつ、YMCAの救援・復興活動に従事していた私に、大きな励ましを与え、心の支えとなったことは、私以外にはわかりません。

2020年オリンピックの年に、阪神大震災後25周年を迎えます。この間、東日本大震災・津波、熊本大震災、北海道大震災や台風・水害等の各地の自然災害で、肉親・知人、家や財産等の喪失体験の中で、心も身体も傷つき、なぜこんなことになったのかと不条理を感じながら、必死に生きておられる人々に、自分の被災体験を重ね思い起こしながら、各地で被災された方々に生きる力が与えられるように祈らざるをえません。

日本の敗戦後の1947年の9月に、関東地方にキャサリン台風がきて、2,200名余りの死者を出した時のことです。日本で戦災孤児の救援活動を行い、焼け跡にできたバタ屋（廃品回収業）の集落で、住民と生活し、支援していたゼノ神父が（神父を助けたアリの町のマリアと呼ばれた北原玲子さんの話は有名ですが・・）、水に浸かった家の2階や屋根の上で助けを求める人々に、ボートで、1軒1軒にローソクとマッチを渡し続けたそうです。被災者は空腹や不安と恐怖に震えていましたが、励ましの言葉と1本のローソクは、空腹を満たすのに何の役にも立たなかったけれど、被災した人々の心をとらえ、被災から立ち上がる勇気と生きる力と希望を与えたのでした。

私は、阪神大震災直後、電気がつかなくなった時に、東京YMCAからいただいた数本のローソクを大切にしています。東京YMCAのスタッフは、このゼノ神父のローソクの話を知っていて、そのスピリットを被災した神戸市民に届けたのでした。そこには、被災した神戸市民に立ち上がる勇気と希望を送りたいという熱い思いが入っていました。電気がついてしまうと、このローソクは、誰も必要とせず、価値あるものとは考えず、不用品として扱われがちです。

私一人の感傷でかも知れませんが、この勇気と希望のシンボルとしてのローソクを家に持ち帰り、



今でもCIPの記念として大切にしている木製のキャンドルスタンドにこのローソクを飾っています。1本のローソクが私たちに何かを語り、何かを問いかけているように思えてなりません。

思い出の1枚

加納光子 (1977 Columbus)



思い出の1枚というご依頼で古いアルバムを探し出して、やっと、コロンブス時代の写真を見つけた。どれも懐かしい思い出なので1枚は無理で、やっと3枚に絞った。しかし、懐かしくはあっても詳細は忘れていた。日記をつけておけばよかったと後悔しても今更どうにもならない。こうした臍をかむ思いの中で懸命に記憶をたどってみた。1977年4月に、私は伊丹空港から1人、ニューヨークに向けて飛び立った。国内旅行でさえ1人で行ったことがなかったので不安は大きかったが、まだ見ぬ世界への好奇心が私を駆り立てていた。

写真1は、大変お世話になったホームステイ先の、ランDESTATT家のスベンさんとジーンさんご夫婦とご一緒に、食事をしている写真である。研修先のオハイオ州コロンバスに着いて直後のことではないかと思う。後ろに写っている人たちも、CIPのコロンブス・グループであったと思う。スベンさんはオハイオ州立大学の心理学の元教授で、ジーンさんはCIPその他のボランティア活動をされていた。ジーンさんはお父さんが、第2次世界大戦中の日本人キャンプと関係したソーシャルワーカーであったこともあって、日本人に対する関心をおもちであったようであった。ナンディ・聿子さんも私の1年前にランDESTATT家にホームステイされていた。



写真2は、やはりコロンブスに到着した直後の空港での写真であると思う。向かって左手奥にインド

のウシャシャや、手前にはイタリアからの参加者が写っている。



写真3はコロンブス・グループで、CIPのスタッフの方の別荘に行った時の写真であったと思う。中央にディレクターのルースさんが座っている。ルースさんの左隣の女性はトルコから来た参加者、その横が日本からの参加者、私である。後列向かって左手のサングラスの男性は韓国からの参加者であった。この後、フランスからの参加者が自国に帰ってしまった。アメリカ文化に馴染めなかったようである。

この地のノースセントラル・メンタルヘルスセンターを主たる研修先として、私は精神障害のある方たちと交流しながら13か月を過ごした。インディアンと黒人を両親にもつ15,6歳の統合失調症といわれた少年が、「ミツコ、ミツコ」とよく話しかけてくれた。ホッとするようなその少年の優しさが、今も思い出の中にある。

—人生に最高の贈り物—

小山哲夫 (1977 Cleveland)

1977年4月に熊本空港を出発。海外渡航の珍しさが残る時代。多くのYMCA職員が見送ってくれました。東京で一泊。翌日羽田から747ジャンボ機で一路ニューヨークへ。飛行機整備の都合で、予定より遅く来てニューヨークJFK空港着。出迎えボランティアもいない。私の不安げな顔を察知した白タクさん。「市内まで送る」と。集合先の「ヴァンダーヴィルホテル」の名を言うと、「OK！問題なし」との返事。相乗りの米海軍水兵さんも乗り合いで、安全だろうと思ひ乗車。と、ところがその水兵さん、近くの国内線ターミナルで直ぐに下車。残るは私一人。ドライバーは、「ショートカット！ショートカット！」と、廃墟となった広い工場跡を通過。映画の殺人事件が起こりそうな場面そのもの。ヤバイ、何が「問題なし」だと不安の中、ようやく無事目的地のホテルに到着。

CIPの研修は先ずニューヨークで全体(約200名近)研修し、その後各地へ。私は約30名のクリーブランドグループの一員。クリーブランドに着き、ホームステイ先のニューカム夫妻がむかえてくれました。

座学研修はオハイオ州立大学で。米国の社会福祉の歴史や制度などを学びました。

実習は各自の専門分野で。仲良くなった香港からの刑務所職員エドモンド・ホーさんは刑務所で。(1980年、香港出張中に、彼の家へ一泊した事があります。)ポーランドからの看護師さんは病院。私はYMCA。

また、28歳での米国初体験。渡米前の米国のイメージは、灰色で何か無機質な感じでした。しかし、出会う人々の挨拶など明るく、木々や、気候の自然環境の話題も会話の端々に多く。「とても美しい今日ですね！」の挨拶はその典型。パッと心が明るくなりました。

スタッフ数名の小さなクリーブランド・ハイツYMCAで研修が開始。私はクラフト(工作)が得意との振れ込みで、小学生の夏のデイキャンプ(キャンプ場に宿泊せず、自宅からYMCAへ毎日通う)のクラフト担当となりました。狭い事務所のこと、私の机は奥の印刷室作業台。周囲のスタッフとも近く、安心・快適。クラフトでは、飛行機、自動車などの模型(ペーパー・クラフト)作りを指導しました。

お前は日本から来たから折り紙も教えなさいとのリクエスト。“鶴”は折れるけど…。困ったなど、ふと通りの向こうをみると、私立図書館。絶対有るとの確信で行ってみると、本棚にありました。表紙に“ORIGAMI”と書いた本。英語解説書ですが、手順の写真もあり大丈夫。キャンパーには、紙を正確に折る基礎からカエルなどが折れるまで教え、皆上手になりました。

とある夕方、キャンパー送迎のお母さんが、YMCA裏の駐車場で、車のドアロックし、困った顔。そこは器用な日本人。ましてや、一応クラフトの達人？ここで役に立たなければと…「問題なし！」と針金ハンガーを手に。ドアの隙間からその針金を差し入れ、ドアロックを外した時。なんとパトカーがスーと。二人のお巡りさん、腰の拳銃に手を添え、大きな声！言葉解らずとも自動車泥棒に間違われたとすぐ解りました。

「コノクルマハー、コチラノゴフジンノー、モノデ…ワタシ・ニホンカラノーケンシュウセイ ^^ ;」等と必死に弁明。私の身分はすぐにハイツYMCAスタッフが証明してくれましたが、そのお母さんは、車検証や車の保有者などの確認に随分時間が掛かっていました。

クリーブランドでは、5つの家庭にお世話になりました。そのホストファミリーと英語の交換日

記を行いました。折角の米国での研修ですから、英語力のアップにと毎日日記をつけ、その英文をホストマザーに添削して貰うというものです。私の実習内容や、日々の戸惑いや楽しさなどの思いを、ホストファミリーが知ることにとなり、とても喜ばれました。

1981年のコロラド州エステスパークで開催のYMCA世界大会の折、クリーブランドにも数日滞在。3組のホストファミリーと再会しました。

1組のNed & Janet Yostさんは、その後、熊本まで訪ねてくれました。



掲載写真は、週末プールパーティのものです。週末には必ず、どこかのホストファミリーで、

それぞれのコミュニティで研修する私たちの集いがありました。やはり、実習先で緊張する私達にとって、この集いは、お互いを励まし合い、心安らぐ素晴らしい機会でした。

この体験を帰国後、熊本県から委託された、アジアや中南米からの「海外技術研修員」日本語研修後の週末フォローアップに活かし、喜ばれました。

まだまだ語り足りませんが、この辺りで。ご笑覧ありがとうございました。

思い出の一枚

村上基子 (1977 Twin Cities)



1977年6月11日、私は、CIP研修のメンバー

として、New Yorkの国連本部に、各国の人たちと共に集合しました。その後、ミネソタ州で実習をしました。5か所のホストファミリーに受け入れていただきました。それぞれのご家庭で多くのことを学びました。実習先は、Bush Child Care institution といまして、現在の日本の児童養護施設で、情緒障害児も含む多様な子どもたちのための収容施設でした。その当時からアメリカでは、グループホーム、小規模施設、ユニット式施設、そして、Commuters Dormitory for Intellectually Disabled Adults などが取り組まれていました。その当時は、日本において、養育の一貫性を理由に大規模な養育をしていましたが、アメリカではすでに小規模で、ケース会議においても、一人の子どもに対して、ケースワーカー、精神科の医師、Family Social worker、教師、弁護士、地域の行政の福祉課の係員など、多種多様な関係者が集まって会議をしていたのに驚きました。ホストファミリーとのつながりですが、今はもう1軒だけになってしまいました。他のホストファミリーの方たちは他界されました。CIPを通して、多くの経験や学びをさせていただきました。ほんとうに良い経験をさせていただきました。⇒筆者

思い出の一枚

東井和子 (1979 Twin Cities)



40年前研修に参加して、職場体験、ホームステイ、参加者との交流、そしてアメリカ社会を実際に自分の目で見て、多くを感じることが出来ました。その体験は、自分の人生の折々に大きく生きています。本当に感謝しております。写真は、Twin Cities参加者の集合写真です。浴衣に赤い帯が私です。その頃のことがよみがえります。

研修後は、知的障害児者入所施設で勤務。定年後4年間、特別養護老人ホームの介護員として、その後、知的障害者の通所施設の支援員として現在も働いております。

思い出の一枚

岸川洋治 (1980 Philadelphia)



この写真は1980年、

The Philadelphia International Program for youth Leaders and Social workers に参加したメンバーとディレクターの写真である。(後列右から2番目が筆者)

参加者は18か国(スイス、ドイツ、台湾、コロンビア、デンマーク、タイ、フィリピン、ヨルダン、韓国、エルサルバドル、イスラエル、イギリス、ボリビア、オーストリア、フィンランド、スワジランド、キプロス、そして日本)22人であった。

フィラデルフィアの郊外にあるクエーカータウン・ペンデルヒルの研修所で3日間のオリエンテーションを受けた。初日に撮影したものである。ここでは参加者同士が知り合うことに主眼がおかれ、小グループでのディスカッション、スライドを使つての各国紹介など交流を深めた。

その後、このグループは1か月間、アメリカで6番目に創設されたペンシルベニア大学でアメリカの主にソーシャルワークについての講義を受けた。講義に関連して各国の状況を報告したり、討議する場でもあった。講義以外に福祉事務所、ドラッグリハビリテーションセンター、刑務所、裁判所などを訪問し、話を聞いた。大学での講義が終了すると各人はそれぞれのフィールドワークの場で研修することとなり、会う機会は少なくなったが、アパートで生活している参加者(4か月の参加者と1年の参加者がいて、1年の参加者は1ヶ月を過ぎるとホストファミリーからアパートへ移ることができた)のところで、しばしば懇親会が開かれ、楽しい思い出となっている。

思い出の CIF 研修

浅野純江 (1996 Paris)

1996年6月、すずらん香るパリに集合したのは世界5大陸から6名の研修生。全国社会福祉協議会で海外社会福祉従事者研修を担当していた私は、フランスの社会福祉・社会開発分野で活動する国際協力団体、とくにアフリカ諸国と人的交流を行っている人びとの働きに関心がありました。そこで関係諸機関を訪問し、担当者の皆さんからたくさんの経験や課題を学びました。

フランス各地での2週間の個別実習を終え、最後の週に研修生全員でまとめの合宿を行いました。会場は風光明媚なフランス中部シェール県ブルジュの町の農家。CIFフランスのメンバーたちがファシリテーターを務めてくれました。実習中の体験で理解できなかったことを改めて確認したり、研修生同士が経験交流をする良い機会となりました。当時ブルジュのソーシャルワーカーだったミレイユ・ブシェさん(写真前列左から2人目)は、現在、CIF INTERNATIONALの会長として力強く組織を率いてくださっています。(同右端は筆者)



フランス国際大会に参加して

青木雅子

今年の、第33回国際大会は、フランス北部のドーバー海峡に面した港町「サンマロ」のパトリックバラゴットセンターで開催されました。7月1日月曜日から7日金曜日までのプログラムです。私は仕事がありましたため、少し遅れ、7月3日水曜日にサンマロに到着しました。大きなBAGGAGEはパトリックバラゴットセンター内の事務所に預けてすぐにPLENARY SESSION(大会講演)へ参加しました。テーマは「Market economy and new public management in social field impacts and alternatives」です。今回のテーマは私にとってむずかしいテーマとの印象がありました。そのため事前にテーマに関する考えを添付ファイル(ワードで3枚ほど)で送付しておきました。それには坂本理事長の貴重なご経験も載せさせていただきました。私は出発前、テーマについて考えるためソーシャルワーカーのいくつかの動画を拝見しました。わたしは高齢者施設で看護師として



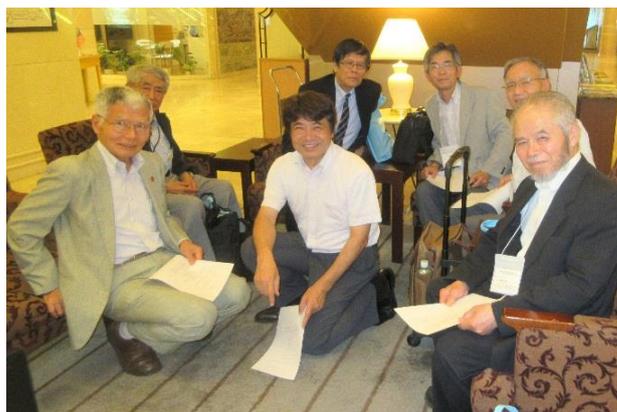
大会中のスナップ(左筆者)

働いており、ソーシャルワーカーの資格はありません。動画を拝見する中で忍耐強く社会的に弱い立場の人の話を傾聴して問題解決に至らせるソーシャルワーカーの姿を知りました。この仕事の質の高さに、改めて福祉弁護士のような仕事であることを実感しました。PLENARY SESSIONでは予想通り難民のこともあげられました。フランス大会は私にとりまして日々学びの貴重な体験となりました。



Colum

2019年6月28, 29日の2日間、聖隷クリストファー大学(浜松市)で行われた、日本キリスト教社会福祉学会第60回大会、日本キリスト教社会事業同盟第75回総会・研修会(同時開催)に参加した、CIFジャパン会員が、スケジュールの合間を縫って6名集まりました。短い時間でしたが、顔合わせと情報交換の時を持つことができました。



参加者(敬称略で失礼します。)

写真前列左より、江口敏一、山本誠、梶村慎吾。後列(左端一人おいて)岸川洋治、坂岡隆司、坂本正路。

<< 2019年度会費納入ご協力のお願い >>

新年度の会費の納入をお願いいたします。また、過年度の会費が未納の会員各位には併せて納入をお願いいたします。(年会費 3000円)

第3回 IPEP に向けて、ご寄付も歓迎します。
郵便振込用紙の必要な方はお知らせください。お送りします。

郵便振替口座 番号 00270-4-54121

加入者名 CIF ジャパン

銀行口座

三井住友銀行 八王子支店
(店番号 843) (普)7815136

口座名義 CIF ジャパン出納責任者梶村慎吾

《編集後記》

今号の「思い出の一枚・特集」いかがだったでしょうか?当初、連載コラムの形を想定していましたが、皆様のご協力が想像以上で、急遽「特集」とさせていただきます。貴重な写真もたくさんあり、思い出とともに共有させて頂けたこと、心から感謝です。このコラムは、次回以降も続けます。今回投稿いただけなかった方、奮って投稿ください。次回原稿締切は来年1月末。発行は3月1日を予定しています。(坂岡)